



Title	ハルジェンドラ・チョードリーさんと短編小説「代わりの品」
Author(s)	高橋, 明
Citation	印度民俗研究. 2021, 20, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86923
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハルジェンドラ・チョードリーさんと

短編小説「代わりの品」

हरजेन्द्र चौधरी जी और उनकी कहानी 'अदायगी'

高橋 明

今回、私がこの文章を書くにあたって依頼されたことは、現代ヒンディー文学の作家とその作品一編について簡単に紹介をすることでした。それに加えて『印度民俗研究』の読者の多くは、大阪大学でヒンディー語を学んでいる若い方たちであることも念頭において書くことにしました。作家として私が選んだのは、私にとって昔からの友人であるハルジェンドラ・チョードリーさんです。その理由は、私がその人柄や、考えについて身近に接して最もよく見聞きしたのがチョードリーさんであることです。私がそれ以外に知っているヒンディー語の作家や作品は、文学史の中に出てくるいわゆる「大家」やその「傑作」です。作品の評価はともかくとして、作家自身について身近に私が知っていることなどまったくくないような人ばかりです。みなさんにも何か好きな文学作品があるとして、それを書いた作家について個人的な人柄などを知る機会があれば、その作品を味わうについてもさらに深い感慨を得られることがあると思います。今回は、私の目と経験を介してではありますが、一人のヒンディー語作家が何を考えていたか、またそのことが作家の具体的な作品とどのような関わりを持つかについて一つの実例を紹介することで、みなさんがヒンディー文学について考える契機になればと願っています。

さて、ハルジェンドラ・チョードリーさんは、**1955年12月2日**にインドのハリヤーナー州ビヴァーニー県のダナーナー村に生まれたことになっています。なっています、というのは知り合った後に私がチョードリーさんの生年月日をたずねた際、「**12月2日**はまちがいないけれど、**1955年**というのは自信がない。インドでは6歳で小学校に入学するのが普通だから、それから逆算するとたぶんそのころになる」と答えたからで、それを聞いただけで私は驚いたものでした。このダナーナー村には私も一度連れて行ってもらったことがあります。当時は、**1980年代**の始めで外国人が村にくるといっても珍しく、私が訪ねたときにも好奇心に駆られたのか村人が**100人**近くはいたでしょうか、私たちの後に列を作ってぞろぞろとついてきたことを覚えています。ハリヤーナーではヒンディー語でイギリス人を意味する**アングレーズ**という単語が外国人一般を指しても使われていて、私の耳にも、「ほら、見ろよ、イギリス人だけ（ここでは、外国人の

こと)」という村人の声が聞こえてきておかしかったことを覚えています。

幼い頃からヒンディー語の詩に惹かれ、自分でも詩作をしていたチョードリーさんは、田舎の高校を卒業した後、ヒンディー文学を学ぶためにデリー大学傘下のある名門カレッジに入学して、やがて大学院に進みました。私と知り合ったのもそのころです。とはいえ、私とは大学の教室で仲良くなったというわけではありません。あるちょっとした手違いから、私がデリー大学に留学するためにデリーの国際空港に到着したその日の深夜、どこに行けば良いのかも分からなかった私がトランクを抱えて迷い歩いている内にたどり着いたのが、たまたまチョードリーさんが住んでいた大学の寮の彼の部屋だったということでした。実は、同じデリー大学のヒンディー文学科大学院に東京外国語大学からヒンディー文学、特にヒンディー現代詩の研究を志して留学していた日本人留学生の S さんとチョードリーさんはすでに親しい友人であったのですが、その内に S さんが寮を出てデリーの南に転居したために、チョードリーさんとしてはまるで恋人と別れた後のような寂しさを感じていた頃だったのです。その後、これも偶然のことながら、今度は同じ日本の大阪外国語大学からまた日本人学生が一人、ヒンディー文学を学びにやってきたというわけで、私からすればそのおかげで早々とチョードリーさんと親しくなるという得がたい幸運に恵まれたことになりました。とはいえ、S さんのように詩を理解するだけの鋭い感覚もセンスにも欠ける、至って散文的な私ではどうも S さんの代わりを務めることはできなかったのですが。チョードリーさんのように、ヒンディー語の文学に魅了されて、その研究を志し、同時に作家、詩人として世に出るという大望を持って大学院まで進むような学生は、当時でもごく希な存在でした。同じハリヤーナー州出身の他学科所属の友人たちと、日頃、冗談を言い合い、隔てなく付き合っているながらも、ヒンディー文学について、あるいは自分の詩について語りあうことのできるような友人が、彼の周囲にいないことは私にもすぐにわかりました。その中で、S さんのような繊細な詩心を持った日本人が、外国人ではありながら、チョードリーさんのかけがえのない友人となったのも無理のないことでした。

チョードリーさんの属するカーストは、ハリヤーナー州を中心に多くが

住む有力な農民カーストであるジャート（जाट）と呼ばれる人たちのものでした。この人たちはかつては北インドに勢力のある独自の王国を築いたこともあり、勤勉かつ勇敢な、また一面では荒々しいとも言える気性の持ち主として知られています。また、近代になってからはアーリヤサマージの活動の影響もあって、正統派のヒンドゥー教徒たちからは、やや伝統から外れた人たちとみなされていたところもあります。アーリヤサマージといえば、近代インド社会において非常に大きな変化をもたらした宗教改革運動を主導したわけですが、チョードリーさんも「もしアーリヤサマージの活動がなかったら、ぼくらハリヤーナーのジャートはみんなシク教徒になっていただろう」と言ったことがあります。とても興味深い現象ですが、みなさんの中で興味があれば調べていただければいろいろな面白いことがわかるかもしれません。ハリヤーナー州には独自の文学伝統もあるのですが、一般には文化的にやや遅れた地域と見なされることがありました。今もそうかもしれません。ただしそれも、大都会への働き手の供給地とされている近郊の土地に対して都会人が抱きがちな偏見としてみれば、インドに限らずどの国でもよくあることです。

チョードリーさん自身も農家の出身で、畑仕事で鍛えられたせいか、あるいは日本人とは体の作りがそもそも違うのか、その握力の強さには私自身驚かされたものです。私が留学していたころに常に不審にも思い不快にも思ったことですが、インド人男性と握手をする際に、彼らがまるで死人のようにふわりと自分の手を差し出すことがよくあり、そういうときにはわざとぎゅっと強く握り返してびっくりさせるといういたずらをよくやっていたものでした。しかし、チョードリーさんとの握手では、こちらが思わず手を引っ込めたくなるほど強く握られるのが常で、それだけでも私は強い印象を受けたものでした。

当時のインドでは大学を出てもなかなかよい就職はなく、ましてヒンディー文学の研究をしていたチョードリーさんのような学生には卒業後しばらくは願い通りの仕事が見つかりませんでした。その頃、多くの優秀な学生たちをとらえていたのはインド上級国家公務員職 IAS の採用試験に合格して高級官僚の道に進むことでした。チョードリーさんも何度かその

試験に挑戦したようですが、結局は途中で放棄して、やがてデリー大学傘下のあるカレッジにヒンディー語の専任講師として就職し、それから長年にわたって人柄そのままに、誠実に若い学生たちにヒンディー語とヒンディー文学を教授し、その傍ら詩集と短編小説集を何冊も刊行するなど、ヒンディー文学の現役作家としても活躍してきました。(ちなみに、まったく個人的なことですが、チョードリーさんのお嬢さんは、数年前に、難関の IAS の試験に抜群の成績で合格し、郷土の誇りとしてハリヤーナー州政府から表彰されたことがありました。) また、その間には、旧大阪外国語大学に 2 年間、その後大阪大学にも同じく 2 年間、さらにはポーランドのワルシャワ大学にもヒンディー語の外国人教師として 4 年間勤務することがありました。その意味では、インドだけではなく、日本とポーランドにもチョードリーさんの教え子が大勢いるようなわけです。

留学時代の話に戻りますと、上のようなまったく偶然のことからその後、私は毎日、毎晩のように、チョードリーさんと現代ヒンディー文学、インドの社会などについて語りあうという実に貴重な機会に恵まれることになりました。特に文学について話すときには、私からは現代ヒンディー文学に対する日頃感じていた不満をぶつけることが多く、チョードリーさんとしては手に余ると感じていたことが多かったのではないかと今となってはそう思います。そもそも、文学とはどのようなべきか、文学とはなんであるか、ということについて二人の考えていることに根本的に大きな相違がありました。私の言い分は、文学とはそもそも普通の人間の暮らしや考えをそのまま普通に描くものであって、時と場合によっては社会的な常識に反すること、さらには反社会的と見えるようなことであっても、作家であれば勇気を持って描き出すべきであるというものでした。私からすれば、それに比べて現代ヒンディー文学の作家たちは、あるべき社会や人間の正しい姿を読者に向かって示すことこそが文学の第一義の目的である、文学者にはそのような社会的な義務あるいは責任があると考えている。そのために底の浅い、建前ばかりの文学となっていると私はそう思っていました。

ある日、チョードリーさんが自分の村であった実際のあるべきごとにつ

いて話をしてくれたことがありました。それがまるで短編小説のように面白く感じられたことから、私は「それほど面白い事実があったのなら、それを題材にしてなぜ小説を書かないのか」と言ったところ、チョードリーさんのそれに対する答えは、「そんなことをすれば村に二度と帰れなくなるし、帰れば帰ったで、今度は二度と無事に村から外へ出られなくなる」というものでした。作家が何かを書くことによって、誰かを傷つけてしまい、その報いを作家や周囲の人間が受けることになると言っているのだと、私もすぐにわかりました。それについては、ヒンディー文学の有名な作家であり多くの優れた作品を執筆したことでも知られるモーハン・ラーケーシュ(मोहन राकेश, 1925-72)のあるエッセイを思い出します。あるときラーケーシュの元に一人の女子学生が自作のヒンディー語の短編小説を携えてやってきます。小説はよくできていました。しかし、ラーケーシュには一点ひっかかることがありました。それというのもその小説は、女子学生自身の家庭内の人物の男女関係に関わるものであり、もしそれをそのまま公表すれば、女子学生だけではなく彼女の家族全員にまで災いが及ぶ可能性があったのです。結局、ラーケーシュはそのことを女子学生に説明して、作品の公表については思いとどまるように彼女を説得したということです。エッセイの中では、ヒンディー語作家を取り巻くこうした社会的な制約についての彼の興味深い感想も述べられていますが、それにはここでは触れません。

ヒンディー文学の作家たちが、自分の書くものについて、その社会的な責任を強く意識して、正しい文学や作家のあるべき姿についても自覚していたことは無理のないことです。ただ、インド文学の長く豊かな伝統や、ヒンディー語以外のインドの文学についてほとんど無知であった当時の私にとって(もっとも、これは今でもあまり変わっていませんが)、現代ヒンディー文学が社会や人間に対する正義、道徳、義務の念ばかりを重視する上っ面だけの文学としてしか見えていなかったことに変わりはありませんでした。そうした文学観に仮に私が受け取っていた通りの面が確かにあるものだと、それがどこから来たものであるかについて歴史的にもあるいは地域的にもより広い文脈の中で、もしみなさんの中で興味のある

方がいましたら、ぜひ考えていただきたいと思います。

私自身は、現代ヒンディー文学のこうした傾向の直接の原因の一つは、マルクス主義及び社会主義を淵源とする進歩主義、ヒンディー語でいうところのプラガティワド(प्रगतिवाद)にあると考えていました。1930年代の進歩主義文学運動の中心となった、現代ヒンディー文学の父とも言われる作家プレームチャンド(प्रेमचंद, 1885-1936)の作品は、主義は別にすれば、お話あるいは読み物としては大変面白いものでしたから、私もずいぶん楽しみながら読みましたが、社会改革のために文学はあるのだとする彼の硬直した文学観や主張にはまったく共感できませんでした。今になって思えば、近・現代のインド社会が置かれた厳しい状況の中で作家たちがマルクス主義や社会主義にひかれ、やがてプラガティワドに帰着したことも十分に理解できます。また、そうした傾向がヒンディー文学の作家にあったとしても、それは彼らがある意味で健全で健康的な倫理観をしっかりと持っていたことの表れとみることもできるわけで、逆に、そうした倫理観と縁のないように見える日本の作家たちこそ、どこか歪みを抱えているのではないかとさえもありません。とはいえ、チョードリーさん自身は、政治的に過激な主義や信条にとらわれることもなく、常識的な家庭人、社会人として穏やかな言動に終始していましたが、マルクス主義的な考え方が一般に力を持っていた世代に属していたことで、やはり傾向としてはそれらの思想に同情的であったことは否めません。

さて、そろそろチョードリーさんの作品についてもお話をしなければなりません。ここでは一つだけ短編小説をとりあげてみようと思います。その理由も、この文章を書く目的である、チョードリーさんの暮らしとそこに根を生やした彼の言葉や態度を通じて作家と文学との関わりを見てもらうために、それがぴったりの作品だと思うからです。

短編小説のタイトルは「代わりの品」(‘अदायगी’, पता नहीं क्या होगा, भारतीय ज्ञानपीठ, 2010) というものです。この作品の冒頭に、まず主人公から読者へのある問いかけがされています。その問いの内容については作品の最後に説明があります。話の筋としては、主人公の男性がデリーの郊外に新築中である自宅の外構の鉄製のフェンスの材料と施工について注

文をするためにある職人（ヒンディー語の原文では लुहार、すなわち、伝統的な文脈では鍛冶屋として鉄製品を作ることがその生業とされる人たちのことです）を訪ねる所から始まります。いろいろと交渉をした結果、主人公は職人に代金を渡しますが、その後、職人はあれやこれやと言い逃れをするばかりで、その後一向に外構工事は始まりません。主人公の友人がそれを聞いて、主人公は値段の点でも材質の点でもまったく職人にだまされているのだと怒り、あげくはその職人を殴り倒さんばかりのところまで話がこじれていきます。この辺りのことはインドではありがちのことで、インドでこうした経験のある方からすれば、よくわかると主人公やその友人の怒りに共感を覚える向きも多いと思います。この小説のインド人読者も多くが、職人に対して憤慨するだけではなく、おとなしい主人公に対してむしろじれったく思うのではないのでしょうか。

面白いことに、職人に相談に行く主人公の頭の中には、鉄柵の外観とか美的要素とかについてのイメージはまったくなく、あるのは丈夫な鉄柵と金網によって歓迎されざる外部からの侵入者をいかに防ぐか、それだけです。というのも、つい最近、主人公の知人の一人の自宅に強盗が押し入り、金や宝石が奪われたばかりか、知人自身が銃撃されて死んでしまうという悲惨な事件が起こったばかりなのです。職人とフェンスについての話がまとまった主人公の頭には、完成した自分の家の姿が浮かびます。「やっとなんかで手すりも金網が決まった。もうこれで家は城のように安全になるのだ。周りを水を張った壕で囲まれ、望楼は高く、抜け目のない敵といえどもロープを投げても届くことはない。周りの家もどれも城そのものだ。隣から隣へは鳥といえども移ることはできない。これで住人はまったく安全にそして安心して暮らすことができるのだ」(p.17) ところが、案に相違していつまでもたっても外構はできあがりません。職人は相変わらず言を左右にして、フェンスを作ろうともせず、また金を返そうともしません。その一方で、主人公が毎日読む新聞には、相変わらず誘拐、強盗、盗賊、殺人事件のニュースばかりが目につきます。外構のない建築途中の家に住みながら、次第に主人公の不安が募っていきます。

ところで、これは留学を終えた後、私が別の機会にデリーに滞在してい

たころのことですが、デリーの街角である朝、会社員風の通勤途中の中年男性が家から持ってきたパンを道ばたの雌牛にやって、その後雌牛に両手をあわせて何かを祈るような格好でたたずんでいるところを見かけたことがありました。よくある光景で、そのこと自体は別に珍しいことでもありませんでしたが、そのことを私はふと何かの話の途中でチョードリーさんに話したことがありました。そのときの私の話しぶりのなかに、どこかそのインド人男性を揶揄するような響きがあったのかもしれませんが。チョードリーさんは私の話を聞くと日頃はなかった珍しく強い調子でこう言いました。「君はインドの社会のことがわかっていない。ぼくらは毎朝、家を出るたびに、今日は無事に家に帰ってこれるだろうか、事故や事件に遭わずにすむだろうか。どうか何事もなく家族のいる家に帰れますようにと誰かに祈らないではいられないのだ。治安のよい安全な日本の社会とはちがうんだよ。ここはインドなんだ。デリーなんだよ。」確かにその通りでした。こうした考え方の背景に、チョードリーさん自身の生まれつき慎重で用心深い性格もあったのですが、現実のインド社会にそれだけの危険が潜んでいたことも否定できない事実です。今、東京や大阪と比べて、デリーの犯罪率や殺人事件の発生の割合がどうちがうのか、数字をもって示すことはできませんが、住んでいる住人が感じている危険や不安について大きな違いがあることは容易に想像できます。今でもそうでしょうが、女性が一人で夜、ちょっとそこまで出かけるということがあり得ないことであるのは、今も変わらないデリーの日々の暮らしの現実であろうと思います。後に面識のできた西インドのプネーに住む女子大学生たちが、同じインドでありながらデリーがいかに怖い都会であるかについて話をしているのを私は聞いたことがあります。実際に、そうなのでしょう。

チョードリーさん一家の暮らしぶりを近くで見えていたときも、親しい友人一家や親戚同士の間で親密な付き合いがあり、お互いの家を頻りに訪ね合うということはよくあるようでしたが、チョードリー家の当時幼い子供たちが子供だけで家の外で遊ぶという光景を私は一度も見たことがありません。パブリックスクールに通っていた子供たちは周囲を高い塀に囲まれ、警備員の常駐する学校の中で友だちと遊びますが、学校から帰ってく

ると家の中から親の付き添いなしに外に出ることはまずなかったと思います。これは近所に住む住人たちの家庭でもたいていが同じようなことでした。外に出ている子供にとって、誘拐、事件、事故などの原因となる大人たちがいつどんな形で立ち現れるか、まったく予想がつかないということなのでしょう。思えば、チョードリーさんの家の玄関口には、油を染みこませて黒光りするようなずっしりと重い竹の棒（ヒンディー語でラーティイと言っていました）が立てかけてあり、冗談でよくこれがあれば強盗が押し入ってきたときに自分と家族を守ることができるのだと笑って言っていました。冗談だけではなかったのだと思います。これはこの短編小説の中の主人公や近所の住人たちの姿そのままです。主人公にとっては、家を訪ねてくる新聞屋、牛乳屋、洗濯屋であってもいついかなる瞬間に強盗に早変わりするかまった信用がおけない存在なのです。思えば、職人のルーズなことに怒り狂う主人公の友人の怒りも、単に金のトラブルからくるものだけではなく、主人公の家の安全性についての不安があるせいでもあるのでしょうか。頑丈なフェンスの有無が、中に住む人間たちの生死の問題とそのままつながっているわけです。

さて、ある日のこと、その職人が突然主人公の家にやってきます。当初は、主人公の友人の悪態と脅しに怯えてやっと金を返しに来たのかと、そう主人公は思います。彼は、職人に「金を返しに来たのか」と尋ねます。ところが、職人は、金の代わりにある品物を持ってきた、と言うとシャツをめくりあげてベルトに挟んでいたあるものを主人公に手渡そうとします。それが何であるのかは物の名前としては小説中では示されていませんが、その後の職人の言葉を聞けば明らかになります。さて、それが何なのか、みなさんはわかりますか。みなさんも、大方想像はついたと思いますが、そうです、職人の手作りになる拳銃です。彼は言います、「中国製やアメリカ製だと一丁10万や15万ルピーはするけど、こいつもそれに負けません。引き金を引けばちゃんと弾がでること請け合ひだし、弾はまた来週もって来ますから。いつも弾を込めて置いときなさいな。」(p.22)

ここで注目すべきは、職人が差し出す拳銃が、一見すると単なる金の代わりであるかのようにも見えますが、それだけではなく家と家族の安全を

守るフェンスそのものの「代わりの品」がこの拳銃なのです。フェンスと拳銃が、その果たす目的においてまったく同義なのです。鉄製品を作るのが仕事である職人としては、フェンスも拳銃もその用途の点では同じ品物を作って、金を払った客に渡しているわけで、その意味で彼はまったく正当な商行為をしているのです。インドの現実をえぐり出すアイロニーが見事に描き出されています。

さて、これを聞いた主人公は、頭の中で何も考えることができなくなり、思考停止の状態に陥ってしまいます。「私はどうすればいいのか。教えて欲しい、どうすればいいのか」(p.22) そこから、小説の冒頭の問いにつながります。主人公は読者に向かって問いかけるように語ります。「手渡そうとする男の手は目の前にある。だが、受け取るべき私の手は動こうとしない。開いた扉を挟んでこの奇妙な宙ぶらりんの状態。」(p.15) 私もここで、この主人公の例にしたがってみなさんに尋ねてみたいと思います。主人公はどうすればよいのでしょうか。みなさんであれば、どうしますかと。

どうやら、依頼された文章の分量もほぼ尽きてきたようです。一人のヒンディー語の作家について私自身が身近に見聞きした体験を伝えることで、作家と作品との間の具体的なつながりの一例を知ってもらいたいとの、この文章の目的がどこまで果たされたかそれはわかりませんが、みなさんにとって現代ヒンディー文学の世界が少しでも身近なものに思えるようになったのであれば、ありがたいことです。

最後に、チョードリーさんのこれまでに単行本の形で刊行された短編小説と詩の作品集、翻訳詩集（旧大阪外国語大学ヒンディー語科卒業生の三木雄一郎氏との共訳）、刊行予定の作品集を以下に挙げておきます。短編小説についてはこの他にも雑誌に発表された作品が2編ほど、pdf ファイルの形でチョードリーさんからみなさんへと送られてきたものがあります。それについては、長崎広子先生にお送りしておきますので、読んでみたいと思われた方は先生にお尋ねください。また、詩についてはヒンディー語詩人の作品を多く公開しているウェブサイト`kavitakosh.org`の中でチョードリーさんの作品を読むこともできます。つい最近のことですがインド国立文学アカデミーのプログラムの一環として、チョードリーさん自身が

自作の短編小説を朗読する動画がユーチューブで公開されています。そのアドレスもここに記載しましたので、こちらも是非ご覧ください。

詩集

- इतिहास बोलता है*, कंदर्प प्रकाशन, नई दिल्ली, 1984.
जैसे चांद पर से दिखती धरती, राधाकृष्ण प्रकाशन, नई दिल्ली, 2002.
फसलें अब भी हरी हैं, वाणी प्रकाशन, नई दिल्ली, 2002.
एक भरी-पूरी दुनिया की तलाश में, नयी किताब प्रकाशन, नई दिल्ली, 2020.

短編小説集

- पता नहीं क्या होगा*, (सोलह कहानियाँ), भारतीय ज्ञानपीठ, नई दिल्ली, 2010, (द्वितीय संस्करण, 2012)
राजा भोज का तालाब, (बारह कहानियाँ), नयी किताब प्रकाशन, नई दिल्ली, 2020.
आवाज़ें, (बारह कहानियाँ), पाखी प्रकाशन, नोएडा, उत्तर प्रदेश. (शीघ्र प्रकाश्य)

翻訳詩集 (原爆に関する日本語の詩のヒンディー語への翻訳)

- परमाणु बम की छाया में*, सह अनुवादक, मिक्कि यूइचिरो, साहित्य अकादमी, नई दिल्ली, 2016.

ヒンディー語詩のウェブサイト

<http://kavitakosh.org/kk/index.php> (2021/10/03)

インド文学アカデミー

Kathasandhi with Harjender Chaudhary eminent Hindi fiction writer & Poet on 9 November 2021, On You Tube.
<https://youtu.be/o1eMiuU4Ar0> (2021/11/24)

हरजेन्द्र चौधरी



2 दिसंबर, 1955 को गांव धनना, भिवानी, हरियाणा में जन्म। दिल्ली विश्वविद्यालय से एमए, एमफिल, पीएचडी, एलएलडी। 1983 से दिल्ली विश्वविद्यालय में प्राध्यापक। ओसाका यूनिवर्सिटी ऑफ़ एड्वेंचर स्टडीज, जापान, वारसा विश्वविद्यालय, पोलैंड तथा ओसाका विश्वविद्यालय, जापान में विभिन्न प्रोफेसर रहे। चार कविता-संग्रह तथा दो कहानी-संग्रह के अलावा अनेक संपादित पुस्तकों में रचनाएं शामिल। रचनाएं अंग्रेजी सहित अन्य विदेशी व भारतीय भाषाओं में अनुदित। क्रिस्टीयान-नागासकी परमाणु-बमारी से निःसृत जापानी कवियों का हिंदी-अनुवाद 'परमाणु बम की छाया में' (श्री पुरविचो मिफि के साथ)। सम्पर्क : vizprohara@gmail.com

कहानी

चरवाहे

कॉलेजों के होस्टल खाली होते जा रहे थे। कक्षाएं अनलगाइन होने लगी थीं। छात्रों में कोरोना-संक्रमण के समाचारों से भय व्यापता जा रहा था। दिल्ली विश्वविद्यालय की ओर से होस्टल खाली करने का आदेश आने से पहले ही वे अपने-अपने घर लौटने लगे थे।

संदीप को साल-भर पहले जंगीराम से पूछे गए अपने इस सवाल का सटीक उत्तर अभी नहीं मिला था कि क्या तुम्हारे पूर्वज यूरोप से आए थे? भूरे बालों और नीली आंखों के कारण जंगीराम अंग्रेज जैसा लगता है।

हिस्ट्री (ऑनर्स) के तीसरे साल में पढ़ते जंगीराम ने तब अपने सहपाठी से केवल यही कहा था कि भारत में तो सब रंग शामिल हैं। क्या नीला और क्या भूरा! हजारों साल से न जाने कहाँ-कहाँ से लोग यहाँ आते रहे होंगे और यहाँ से दुनियाभर में गए होंगे।

अकाल, भूकंप, ज्वालामुखी-विस्फोट और सेलब जैसी प्राकृतिक आपदाओं ने ही नहीं, महारथियों और महामारियों ने भी सदियों से दुनियाभर में लोगों को विस्थापित किया है। अब तो कुछ भी कहना मुश्किल है कि कौन कहाँ का है और कौन यहाँ का है।

कोरोना-संक्रमण का भय होस्टलवासियों को हॉकने

लगा। जंगीराम ने कहा, यूँ समझो मित्र, कि मनुष्य का इतिहास विस्थापन और प्रवासन का इतिहास है। कहाँ से उनका तो कहाँ बस गया। हजारों साल के इतिहास में ऐसा एक भी दृशक नहीं मिलेगा, जिसके दौरान दुनिया का कोई न कोई हिस्सा किसी संकट से ग्रस्त न रहा हो। समय-समय पर प्राकृतिक आपदाएँ, महामारी और युद्ध मनुष्य को इधर-उधर हॉकते रहे हैं। आज निजी महत्वाकांक्षाएँ भी उसे हॉक रही हैं। तुम विदेश में बसने की इच्छा जता चुके हो। मैं ज़िंदगी के नए, बेहतर रास्ते की खोज में लगाम घौने तीन साल पहले दिल्ली आया था और उसी खोज के चक्कर में अपने पिछड़े गाँव-घर का रास्ता भूलता जा रहा हूँ।

संदीप के पापा मोबाइल पर सूचना देकर दूधवाड़ और टोयोटा प्रॉच्यूरर लेकर खूद पढ़ेंच गए। संदीप के मन में सवाल उठा कि अब जंगी होस्टल में अकेला कैसे रहेगा। अपने घर भी कैसे जाएगा?

जंगीराम का गाँव देत के टीलों बीच बसा है। पाकिस्तान बाँईर के करीब। वहाँ दिवस प्रायः कूर होते हैं, रातियाँ रहस्यमयी। पुराने रास्ते मिटते और नए रास्ते बनते रहते हैं। पहचान के लिए वहाँ न कोई नदी है, न कोई पोखर।

